

なるほどコラム

郡山市の「采女伝説」 うねめ

1,300年前から語り継がれる「采女伝説」は、安積の里（現・郡山市）が冷害続きのため、奈良の都から来た葛城王が巡察したものの、年貢の免除が許されなかったことから始まります。地元では、王をもてなす宴を開きましたが、なぜか機嫌の悪い葛城王に対し、「采女伝説」のヒロイン「春姫」は、次の句を詠み献上しました。

安積山 影さえ見ゆる山の井の あさき心をわが思わなくに

（訳） どうして機嫌が悪いのですか。安積山のふもとに山の井の清水があります。山の影を水面に映し、浅い井戸のように思われますが、とても深い清水です。それと同じで、私たちが王を思う気持ちは、とても深いものです。

これを聞いた王は喜び、春姫を「采女」として仕えさせることにしました。しかし、春姫には、次郎という婚約者がいたため、悲しみをこらえて都へ上がりました。

都での春姫は、帝（天皇）の寵愛を受けていましたが、中秋の名月の日、次郎恋しさに猿沢の池畔（奈良）の柳に衣をかけ、入水したようにみせ、愛する次郎の待つ安積の里へ向かいました。

里へたどり着いた春姫は、次郎の死を知り、雪の降る夜、あとを追って次郎と同じ山の井の清水に身を投じたという話が伝えられています。